



子ども茶道教室

旧藏内邸で味わう「和」のおもてなしの心

表千家の薄茶点前を体験しよう。

2024.12.1日

午前の部

11:00 ~ 12:00

午後の部

13:00 ~ 14:00

内容は午前 / 午後同じ。

対象者 小・中学生 *小学3年生以下は必ず保護者同伴

内容 茶の湯ですべての点前の基本「薄茶点前」を講師の指導で体験します。自分でお抹茶を点て、美味しいお菓子をいただきます。

講師 築上町文化協会茶道部の皆さん

定員 各回 10人

会場 旧藏内邸応接間



参加費 小・中学生 500円 / 保護者と一緒に茶道体験参加 1,000円(入館料金を含む)
保護者で見学のみ 310円(入館料金)

申込 旧藏内邸へ電話で事前申込 ☎0930-52-2530
(先着順 / 定員になりしだい締切)



旧藏内邸とお茶のおはなし



狩野厚信筆「四季の果物」(天袋絵)



さまざまな組子欄間



竹を模した雨樋

大正時代、旧藏内邸の増改築を指揮した当主の藏内保房は、田能村竹田の文人画と煎茶をこよなく愛し、邸内意匠の至るところに煎茶趣味が見られますが、かつては庭園北東側に離れの茶室があり、茶の湯(お抹茶)もたしなんだといいます。



煎茶の茶室(丸窓向こうに百日紅)



離れの茶室跡(切妻造の茶室があった)現在は平尾台の千仏石製の礎石・景石が残る。

お茶の歴史を知らう。

ごく平凡で当たり前のことを「日常茶飯事」といいますが、ご飯を食べ、お茶を飲むことは現在では当たり前のようになっています。お茶を飲む習慣は平安時代(9世紀)に留学僧が中国から日本に伝えましたが、一般に普及するのは戦国時代(15世紀)以降のことです。

平安時代は荒く粉碎した茶葉を湯釜で煮出し甘葛煎(ツタの樹液を煮詰めた甘味料)などを加えて飲む、ハーブティーのようなもので、寺院や宮中での儀式に用いられました。

鎌倉時代になると、中国の宋に留学した臨済宗の開祖、栄西が抹茶法(茶葉を粉末にする)を日本に伝え、以後、禅宗や律宗の僧侶が全国に広めました。鎌倉幕府の歴史書「吾妻鏡」には栄西が三代将軍、源実朝に抹茶を点て、二日酔いの良薬と説明したことが記されます。

南北朝時代から室町時代(14世紀)になると、地方の有力武家の菩提寺でも茶の栽培が始まり、僧侶や貴族以外の武士の間で喫茶の習慣が広まります。

築上町では、天徳寺の麓の立屋敷遺跡(本庄/鎌倉~南北朝時代)で天目茶碗や土風呂など茶の湯道具が発掘され、宇都宮氏館跡(松丸/南北朝~戦国時代)では抹茶を挽く茶臼が出土しています。築上町の城井谷を拠点とした宇都宮氏もお茶をたしんでいたのでしょう。

侘茶を大成した千利休が伝えたかったこと。

室町時代、村田珠光(1423-1502)は書院における豪華な茶の湯に対し、華美な要素を削ぎ落とし、精神性を重視した静寂な茶の湯「侘茶」を起こし、四畳半の茶室を考案しました。

戦国時代から安土桃山時代にかけては千利休(1522-1591)が侘茶を完成させ、現在、表千家、裏千家、武者小路千家の三千家があり、流派によりお茶の点て方などの作法が異なります。

千利休は茶の湯の極意として「利休七則」を唱えました。

1. 茶は服の良きように点て(気配りの大切さ)
2. 炭は湯の沸くように置き(事前準備の大切さ)
3. 花は野にあるように生け(自然体でいることの大切さ)
4. 夏は涼しく冬暖かに(思いやりの心の大切さ)
5. 刻限は早めに(気持ちにゆとりを持つことの大切さ)
6. 降らずとも傘の用意(不測の事態に備える大切さ)
7. 相客に心せよ(互いに尊重し合う大切さ)

千利休が茶の湯を通じて伝えたかったのは、作法や形ではなく、すべて心についての教えでした。いくら形が整っていても心がなければそれは本物ではないという教えです。



宇都宮氏館跡の茶臼



茶臼(出土したのは下臼)



龍泉窯系青磁碗(舶載品)



天目茶碗破片(舶載品)



宇都宮氏の拠点城井谷(築上町)上記資料はすべて城井谷で出土した。藏内氏もかつて宇都宮氏の家臣。